

素囃子の変遷 (一)

竹 本 幹 夫

【はじめに】

素囃子(しらはやし)とは、(杜若(三輪)両曲の舞に關する、古くから観世流独自の秘伝とされていた特殊演出である。現在、右両曲に素囃子の小書がつくと、それぞれ序之舞の序、神楽の序の後に、特殊な奏法のイロエのような伴奏でシテが舞台を一巡することになる。この素囃子は、右両曲の特殊演出のうちでは最も古くからあった習い事であり、両曲に固有の演出というよりは、序之舞や神楽など序のある舞事(まいごと)についての特殊演出を原態とし、それがたまたま(杜若)と(三輪)に秘伝として残ったものと解釈した方が、理解しやすい面もある。つまり、古くは序のある舞事のすべてに適用可能な、普遍性のある演出であったとすら考えられ、その傍証たりうるような資料も存在するのであるが、それにしても、それがなぜ特定流派の特定曲に限定されるにいたったのかについては、やはり十分な説明は困難なようである。これを「素囃子」と表記するようになった

のは、第十五代観世大夫元章の時代以後であるらしく、江戸中期までは、仮名書きか、又は「白拍子」「白囃子」と書かれていた。どの曲のどの部分がシラバヤシであるのかも、必ずしも一定せず、古くからシラバヤシ物の双璧とされていた(杜若(三輪)についても、その演出にいたってはなほ複雑な変遷の経過を想定できるようである。シラバヤシの原態についてはかつて述べたことがある(「シラバヤシ考」・『国文学研究』65集)。以下、前稿ではふれなかった江戸期のシラバヤシの変遷を中心に、シラバヤシの名目・シラバヤシ物の諸曲・(杜若(三輪)のシラバヤシの諸形態・その習い事としての消長の四項目につき、何回かに分けて考察していきたい。論の展開上、とくに今回分には、前稿と重複せざるをえない点が多いことを諒解されたい。

【シラバヤシの名目】

シラバヤシに關する現存最古のまとまった説は、以下にその主要部分を引用する観世宗家蔵『禪鳳書物写し』(第七代観世大夫宗節の

筆か)と呼ばれる、断簡一枚であろう。

(前欠) ヲバ、シラバタラキナド□申候(何?)

哉。ハヤシテノ方ヨリハ、シラバヤシ、シテノ方ヨリハ、シラバタラキニテ候ハシヤ。何方へ申テモ不_レ苦候。

(「物キル段ノハヤシ」一カ条を略す)

一、山ウバノクセ舞過□、「山メグリ」ト申テハ、シラバタラキニテ可_レ有□□(候哉?)ホ

ソノ舞ニテナキハタラキハ、シラバタラ(キ?)ナド、申、サヤウノ時ノハヤシ、シラバヤシト申テモノカヌ事ニテ候。

(同筆) 禪鳳書物ヲウツス
一部意味の不明瞭な部分もあるが、大意の把握にはさして支障はあるまい。既知の金春禪鳳伝書の記事と重複する内容ではないので、それらとの比較はできないが、『囃子之事』

一卷を、後に鼓の名人となった宮増弥六に伝授するほどの禪鳳であるから、囃子につき専門の見解を述べることは何ら不審はない。しかも書写者に比定される宗節は、禪鳳の女婿である観世道見の子であるから、右の全体を禪鳳の説の引用とみても大過あるまい。

右によれば、本式の舞ではない働事(はたらきごと)を、囃子方から呼ぶと「シラバヤシ」、為手方から呼ぶと「シラバタラキ」となるわけである。彰考館蔵明応二年(一四九三)『金春弥七鼓伝書』に、「山姥、山廻」

といふ段ハ、しらばやしにて候」とある説は、内容的にも年代的にも禪鳳の説との親近性が認められるが、同書が〈通小町〉の立チ廻りにつき、『「あらくらの夜や」といひてしらばやしにて候。働段ハしらばやしにて候」というのも、やはり禪鳳の「本ノ舞ニテナキ働キ」に関する説と、同次元のものといつてよい。つまり、イロエ・カケリ等々の祖型的な働事を、為手方たる禪鳳はその所作に注目してシラバタラキと呼び、囃子方たる弥七はその伴奏に注目してシラバヤシと呼んだのである。〈杜若や三輪〉の場合でも、古くはイロエの部分のみをとくにシラバヤシ・シラバタラキと指定していたことが、室町後期の諸伝書の記事から確認できる。加えて禪鳳の説は、室町後期の「シラ、バヤシの説」が囃子方の伝承を中心に構成されること、観世宗家蔵『宗節仕舞付』の〈杜若〉に「しらばたらき」を舞う由のあること、多くの伝書でシラバヤシとシラバタラキとがしばしば同義に用いられることなどの諸事実とも、よく符合するのである。『禪鳳書物写し』の見解は、シラバヤシに関する最も基本的な認識を代表していたと考えてよからう。

室町末期から江戸初期の間に、シラバヤシは〈杜若や三輪〉に代表される習い事の名目として、次第に限定して用いられるようになって

る。それにともない、その異称であるはずのシラバタラキは、働事の総称的なものから、〈屋嶋〉〈隅田川〉等々の特殊演出の名目へと、シラバヤシとは別個に秘伝化され（観世新九郎家文庫蔵・正保五年（一六四八）写『新九郎流小鼓習事伝書』）、次第にその曲数を増しながら、「素翹」（しらがけり）などの習い事をも新たに派生するにいたる（鶴山文庫蔵・明和四年（一七六七）『習事伝授書留』）。つまり、江戸期になると為手方でも、〈杜若や三輪〉のシラバタラキをシラバヤシと呼ぶようになったのである。これらの現象は、為手方において〈杜若や三輪〉の特殊演出たるシラバタラキが断絶し、これを囃子方のシラバヤシの秘伝によって再興するという事態が、室町末期以後に生じたらしいことをも暗示している。

右面曲のシラバタラキ退転・シラバヤシ秘伝化と、それに続く右以外のシラバタラキ物の秘伝化という、想定される一連の現象の一方で、『本ノ舞ニテナキ働キ』をシラバタラキともシラバヤシとも呼ぶという禪鳳以来の立場も又、同時に存在していた。そしてこうした呼称の錯綜が、シラバヤシの変遷過程をいやが上にも複雑にしているのである。

（たけもと みきお 法政大学能楽研究所員）